静中・静高関東同窓会 会報

静中・静高関東同窓会
会報　第34号
平成5年1月19日発行
編集人　上杉重吉

青春と自治

40年前とその後、そして今……

71期　下　薫

今回初めて関東同窓会総会に参加して、若い女子学生の多さに一驚。我々の頃は千余名の中で僅か四十名に過ぎなかったことを思い出し今昔の感を深めた。

席上、昭和30年2月25日付の卯高新聞と自治会報が当時の才媛から披露され懐しく読む内に、その感想を書くよう編集子に求められた次第である。

この日付の頃、我々71期の殆んどが大学受験に狂奔していた時で定かな記憶に欠けるが、紙面を読むと「前期自治委員長やっと決る」「例年にない淋しい予餞会」更には論説として「受験勉強を克服して自治会を発展させるよう」等々とある。そして片隅に「自治会功労者として矢部、諏訪、山本他十六名の諸君に感謝状が贈られた」とあり、小生の名とともに鳥居欣一君の名前があった。

71期生が入学した時は上級生は長谷の新校舎に移り、我々一年生だけが城内の兵舎改造校舎で過ごした。私のように城内中学出身にとってみれば隣の兵舎に移っただけというところであった。

二年生になりピンク色の校舎に行き、城内高等学校から静岡高等学校と校名が変わるに至って初めて高校生を実感した次第である。

授業は100分間で、これが何とも長く苦痛であったが、当時の日本一の進学校であった日比谷高校も同じだと言われ妙に納得した記憶がある。また、三年間で90単位分の時間割が組まれているが卒業は85単位あれば良く、三年生の時残りの5単位分を自由に使えるユニークさもあった。今はどうなっているのだろうか。

ユニークと言えば自治の風潮は他の学校に比べて遙かにあり、いわゆる教師の干渉というものはあまり感じなかった

しかし、冒頭に紹介した記事の通り、進学校である故に自治会長のなり手が無く、教師の方が自治会存続に尽力するというのが実態であった。

68期から通年ホームルーム制がとられたと聞くが、後から出来た制度と自治会とのかかわり合いが何とも複雑になっていた。

ホームルーム内の選挙でホームルーム委員一名と代表委員二名が選出されるが、ホームルーム委員は自治会とは無関係で級のまとめ役的なことをする。代表委員は米国の上院のようなもので、全体から選出された自治会長とともに自治活動をするシステムになっていた。

我々の時も自治会長のなり手が無く最後に前述の鳥居君の俠気を見込み、我々が代表委員となって協力するからと説得した。ところがクラスの選挙で私はホームルーム委員に選ばれてしまったので自治会に直接参画出来なくなり、鳥居君に約束が違うと言われて閉口した覚えがある。ただ卒業の時功労者の仲間に入れてもらっているので幾らかは貢献したのだろう。

東大の駒場寮が警察に囲まれマルクス・レーニンの名前が聞かれ始めた頃で、自治会長は苦労したと思うが75周年記念として仮装して市中行進をしたことの方が記憶に鮮やかである。

この後、60年安保、学園紛争、安田講堂陥落と続く激動前夜の平凡な日々であったかも知れない。

それにしても少数にして優秀な女子生徒は目に眩しいとともに、自治会でも立派な発言をされていたことが印象に残るとともに、先駆者として努力されていた姿と、総会での若い女子学生の屈托の無い姿とが仲々重ならないものと感じた次第である。

ここまで書いたところで静岡に置いてあったものを引き出して見たところ「創立75周年、校舎落成記念、第六回卯高祭」文化祭プログラムが出て来た。静岡市公会堂で昭和28年10月2・3日開催とあり、「商船テナシティ」上演が予告されていた。そして10月4日仮装行列（3時市中行進）とも書き添えてあった。やはり青春の輝きの一瞬であったのだろう。

◎関東同窓会の運営は会員みなさんの拠金によるほかありません。幹事の方から同期生に呼びかけてくださいませんか。

第18回 総会・懇親会

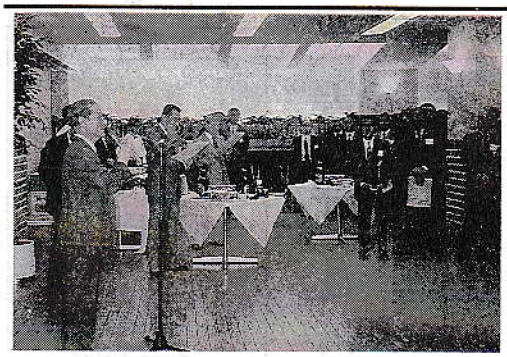
平成4年度総会は、6月19日夜新日本証券大食堂に三百名が集まり、盛大に開催された。

出席来賓は、石田徳行静高校長をはじめ北川巻平同窓会副会長＜写真＞、松原春雄中部支部会長、同窓会幹事の蔭山昌弘（81期）、宮川誠（85期）両氏ほか。

参加者を10年ごとの期別にしてみると――、

40期代…19名　50期代…41名
60期代…57名　70期代…45名
80期代…18名　90期代…7名
100期代…106名

（今後、80期代と90期代の多数参加を要望したい。）



総会議事は平成三年度事業報告と会計・監査報告、平成四年度事業・予算両計画が提案され、可決承認された（下記を参照）。また任期3年の役員選任年にあたるため、現役員の全員再任と次の3氏を副会長に推す提案がなされて、活躍を期待する声とともに承認をされた。

田中俊男（66期）、海野幸雄（71期）、池田幸司（85期）

懇親会に移って、会場いっぱいにぎにぎしく、静岡の名産に舌つづみを打ちながら歓談が続いた。女子大学生に囲まれた大石会長の

平成3年度　静中・静高関東同窓会決算書

（H3.4.1～H4.3.31）

I 収　入	
平成2年度繰越金	1,106,875円
平成2年度会費（30名）	60,000円
平成3年度会費（837名）	1,800,000円
広告料	40,000円
預金利息	11,097円
特別金の運用益	1,000,000円
静岡本部より助成金	700,000円
雑収入	27,200円
計	4,745,172円
II 支　出	
会報	476,000円
会報編集費	100,000円
郵送費	875,424円
印刷費	93,090円
人件費	200,000円
消耗品費	164,531円
交際費	30,000円
会合補助費	748,138円
雑費	5,356円
謝礼	100,000円
平成2年度借入金返済	700,000円
計	3,492,539円
III 残　高（次年度繰越）	1,252,633円
IV 特別金	5,000,000円

上記監査の結果適正であることを認めます。

平成4年5月15日

監事　後藤弘枝
監事　松野敦子

平成4年度　事業計画

1. 総　会	年1回
2. 顧問会	年1～年2回
3. 幹事会	年5回～年6回

・顧問会と幹事会は合同でやる場合もあります。

4. 会報の発行	年2回（6月，12月発行）
5. 懇親会	ゴルフ大会（年2回），講演会，釣り大会 ハイキング大会，麻雀大会　等

平成4年度　静中・静高関東同窓会予算

（H 4.4.1～H 5.3.31）

I 収　入	
繰越金	1,252,633円
年会費 2,000円×1,000人	2,000,000円
広告収入	520,000円
静岡本部より助成金	700,000円
特別金運用益	500,000円
計	4,972,633円
II 支　出	
会報発行費	500,000円
会報編集費	200,000円
郵送費	900,000円
印刷費	150,000円
人件費	300,000円
消耗品費	180,000円
交際費	70,000円
会合補助費	800,000円
雑費	200,000円
事務局専用電話設置費	70,000円
宛名書き用シール製作費	600,000円
予備費	1,002,633円
計	4,972,633円

まわりなどでは歓声があがり、熱気に包まれていた（写真）。

さいごに全員で「岳南健児一千の……」を高らかに斉唱し、再会を約して盛会裡に幕を閉じた。

（60期　上杉重吉）

第六回印高会ゴルフ会

平成4年10月29日（木）

箱根カントリー倶楽部

朝から雨の降る生憎の天気ながら25名の参加者が熱戦を展開――

優勝…川上貫三（71期）

2位…岩崎為明（67期）

3位…岩井元枝（ゲスト）

なお、第七回は平成5年5月27日（木）の予定。奮ってご参加を！

同期会など

四三期

◎三笑会

四月二十一日（月）静岡の三笑亭で第百二十一回目の昼食会があり出席した。大阪から平山桂君も遠路出席されたので、静岡の常連八名とあわせて十名となった。

私は久しぶりに余裕があったので駿府公園あたりを散歩したが、陽春四月、桜花も満開で見事であった。

本年度から見原三郎・堀田利郎・近藤伊佐男君が新たに幹事を引受けられて積極的に運営する由で、これからの会合が楽しみだ。

例によって三笑亭の御馳走を賞味し、本部の方々の話や関東・関西の動向や行事の報告で話も尽きなかった。

再会を楽しみに帰路についたが平山君と駅まで同行して東西に別れた。

出席者は次の通り（写真下）

近藤伊佐男　磯谷幸一郎
見原三郎
高須　彰　滝口亀太郎
堀田利郎　近藤久一郎
松永清平
平山　桂　西沢純三

（西沢純三）

◎合同四三会

四三会の全国大会は昭和五十九年五月八日熱海の西山ホテルで開いたままであった。静岡の三笑亭で毎月開いている昼食会での打合せで、会員が元気でいる間に多くの方々に出席して頂けるように一度年内に開こうではないかということになった。

新幹事の御尽力で熱海西海岸のホテル大野屋で九月二十四・五日に開催することになり、会員五十名に案内状を発送した。生憎秋の行楽シーズンで行事が重なった方もあり、また御療養中の方々もおられて出席者は十一名となってしまった。

今回は久しぶりにのんびりムードを満喫しようと午後二時に集まることにした。一番乗りは千葉の三好由三郎君、次に私と大阪の平山桂君が到着した。静岡からの磯谷幸一郎・高須彰・堀田利郎・見原三郎・八木友治君等が揃って見えられ、東京の長戸寛美・三宅静雄両君も続いて到着された。

最後に静岡の近藤伊佐男君が偶然にも当日は奥様もこの大野屋で女学生時代のクラス会があるので御一緒に来熱されたので我々全員定刻までに集まった。

ひと休みしてから大野屋自慢の新改装のローマ風呂でのんびり寛いだ。

一同揃って宴席に移り、先ず近藤伊佐男君の挨拶で始まり、平山桂君の乾杯で会員一同の健勝を寿いだ。伊豆の海の幸、山の幸を肴に美酒も充分に満喫することができた。

話題も尽きなかったが、最後に記念撮影をしてから静中校歌を四番まで斉唱し、部屋に戻ってさらに二次会を開いた。

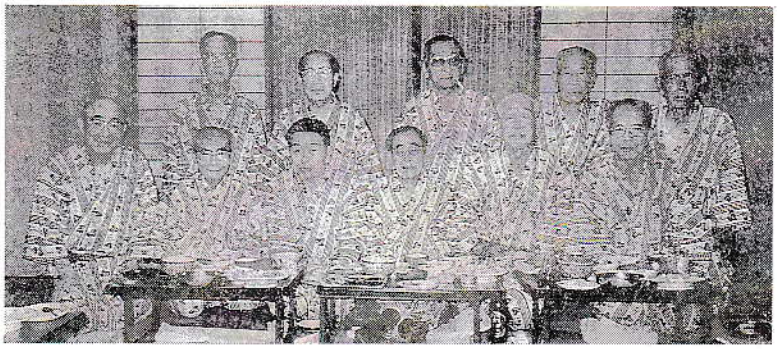
明朝は年齢の所為か皆早起きで海からの日の出をベランダから拝むことができた。朝食にも一本つけてゆっくり寛いで語り合った。

ホテルは十時に出発し、熱海駅で名残りを惜しみつつ東西に別れて帰路についた。

出席者は次の通り（写真左）

堀田利郎　三好由三郎
高須　彰　西沢純三
磯谷幸一郎　近藤伊佐男
三宅静雄　長戸寛美
八木友治　見原三郎
平山　桂

（西沢純三）



四五期

4年6月発行の会報第33号で故佐野理平君の訃をお知らせしたばかりなのに、引き続きこの第34号で大石清君の訃を知らせねばならないのは、まことに残念です。

先の第33号で大石君が前立腺肥大の手術を受け、引き続き胃の手術を受けたが快方に向かっていると報じました。事実退院後彼に予後について尋ねたところ外出も可とのこと。そこで、有楽町での第45期定例会の常連（柏木、草野、鈴木、田附、速水、松林）が相計り、大石君の全快祝をやろうということになった。

呼びかけに応じて5月12日大石君も顔を見せ、みんなで喜び合い励まし合って歓談できたのであった。それなのに、その後彼は入退院を繰り返し遂に8月25日亡くなられた。5月12日の彼の状態ではまさかこんなに早く逝かれるとは考えられないことであった。

夫人の話では死因は癌とのことであった。今にして思えば、彼はそのことを既に気付きながら、敢えて5月12日の会に顔を見せに来たのではなかろうか。彼の心情を察すると胸が熱くなる思いである。8月27日の葬儀には、私ども常連6人が参じて焼香し、静中第45期生一同の名で香典を霊前に捧げて来ました。みな様とともに故大石清君のご冥福を祈り上げます。

大石君が生命保険協会の倶楽部の会員であったおかげで、有楽町のその倶楽部を利用して第45期の定例会（奇数月の第2火曜日）を持つことが出来、まことに有難いことであった。田代正君の存命中には、彼が日本興業銀行に勤めていた関係で、麻布の興銀のクラブを利用していました。田代君の歿後は適当な会場を求めていたところ、大石君の厚意で第45期の定例会が持てた次第です。

静中・静高関東同窓会が発足した昭和50年から今日までに関東地区在住の第45期生で他界された方は次のとおりです（括弧は歿年）。

田中正治(昭52)、原信衛(昭53)、青木栄（昭58）、桜井誠（昭58）、斉藤錬一（昭59）、田代正(昭59)、大石清(昭61)、千葉保次(平2)、佐野理平(平4)、大石清(平4)。

会に出席したい意欲を持ちながら健康上参加できない方が多くなって来ました。止むを得ませんが寂しいことです。何とか第45期の連絡を密にしたいと期しておりますので、近況何なりとご連絡下さい。

（鈴木弥門）

四九期

本年度の総会は去る九月二十三日、秋分のよき日に、静岡の「もくせい会館」で開催された。

顔を合せた者、総勢二十四名、うち東京及び地方より出席したもの九名。

鈴木東作代表幹事から挨拶があり、名古屋の松原春雄君の乾盃で宴は始められた。

懐しい想い出話とともに、各自の近況報告などで話ははずんだ。

が、席上杉本久敬君より曽根重四郎君の急逝（九月六日）の報告があり、昨年も元気で出席した曽根君のことが話題を占領した。

出席者は地元から、鈴木(東)、上田（栄）、大石、大塚、風間、沢野、杉山（佐）、寺平、寺尾、戸塚、野村（旧桑原）、長谷川、原木、山本（厳）、清水（慧）、東京及び地方から、加藤（馨）、篠田、直原、山家、伊藤（徹）、杉本（久）、松原、菅沼。

この二、三年で関東地区では、江山秀明（平2・8・24）、上杉一郎（平2・12・13）、矢崎宗男（平3・1・5）、安本久(平3・7・8)、浦野庸二（平3・11・3）、曽根重四郎(平4・9・6)が亡くなられた。深くご冥福をお祈りする次第である。

出席者一同は揃って元気一杯で、話もはずんでつきなかった。

出席者はみんな七十五歳以上で、宮沢次郎大先輩の「青春」大賛辞、希望ある限り若く、失望と共に老ひ朽ちる。病にある者は自ら克服する努力を継続することが大切だ。

最後に菅沼も青竹踏みを毎日千回、ここ数年続けて若さを失わないようにしている。皆様も益々ご健康に留意されることを祈ると閉会の辞を述べ、会をしめくくった次第である。

（菅沼　栄）

五三期

今年の総会は既報の如く関東の企画という事で検討の結果、大石君のお世話で昨年新築の新日本証券の熱川荘を利用させてもらう事とし、奥野君が静岡の諸君と連絡しつつ具体案をまとめ、三年十二月在京同級生の会で発表し四月十八日開催となった。

当日は心配された天候もまずまずで三時頃から懐しき面々が続々と到着する。そのうち司馬君の財布が行方不明なんてハプニングもあったがお国柄タクシーの運転手は安倍川の義夫、無事届けられてめでたくお愛嬌となった。

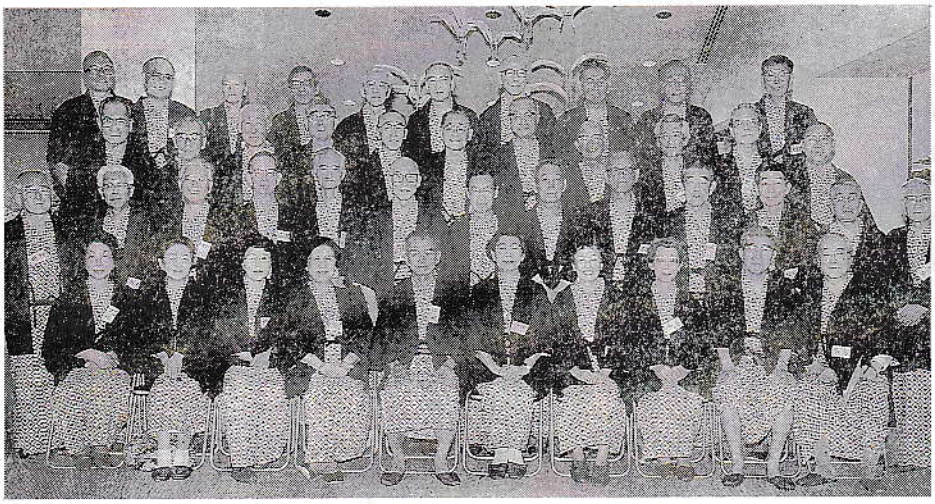
受付も遊び心に部屋割を籤引にしたが新装の部屋はいずれも高級ホテル並で新緑と八重桜の高台から伊豆の海を眺望して気分良好、温泉浴場と食堂も眺め良く近代的な使い勝手と気易さがある。これで旧友相語りつつ海山の幸を楽しんで一泊一万円会費は如何にも安い。そのためか出席者は写真のように夫人同伴七組、四十四名の盛会であった。

六時総会に先立って記念撮影、食堂に移動開会、先ず今回の企画担当の奥野君から経緯説明、この家の主人公大石君から歓迎の挨拶、次いで当日奇しくも長谷川君の命日でもある事から物故同級生の霊に黙禱、静岡の同期生会から中村、清水、海野の諸君が会務及び会計の報告、奥野君から関東の状況報告の後、福岡から参加の小嶋、松永両君の音頭で乾杯、宴に入る。

料理は当熱川荘の管理人兼板前さんが浜から仕入れた魚類とあっては美味の一言に尽きる。新緑の薫りはビールも格別、しかし何と言っても友達と酌む酒は喜びに満ちている。白頭翁君も光沢頭氏も忽ち童顔に帰って悪戯を語り失敗を笑い合えば廻り来る春草の心に話は尽きない。時間を忘れて過す

うち予定の八時となり、昔ながらに「岳南健児」を斉唱して中締めとした。

大石君の案内で二次会、リフレッシュルームはカラオケその他設備万端調っている。水割等やりながら一唸りも良し、ダンスまた良し。ホスト役の中にも、外国仕込みの瀟洒マン氏が夫人連にモテモテ、お疲れ？　余計なお世話さ、君は大工の伜、ノミ一丁と行き給え、というわけで夜の更けるまで楽しんだ。



夜が遅くても朝は五時に目が覚めるのは何の所為か知らないが、皆早くから朝湯の温泉に昨夜の酒を流して七時半から朝食で中には迎え酒の豪傑もおり、夫人達が再会を約束するのも微笑ましく、互に来年を期して解散した。

哀悼　水野尚君

熱川総会に出席の予定であったが直前に不参との事で気になっていたところ会終了の翌日四月二十日急逝の報があって級友を驚かし悲しませた。

同君は静中在学中から多趣味でスペイン語等を級友に披露したり、剣道では古武士の風格があって感心させられたものであった。また近年は謡や狂言を嗜み、級会のお開きには目出度い小謡で締め括ってくれたのであった。君を偲び、謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る次第である。

慶祝　清水四麻夫君

同君は4年春の叙勲で勲五等雙光旭日章を受章された。戦後復興の時期から船舶無線業界及び清水市の経済振興に尽力し、保護司・裁判所調停委員等の公職も勤めて既に紺綬及び藍綬の二褒章ならびに数多の表彰を受けておられるので今回の叙勲は当然のことながら同級生としては大いに誇るべく、心から慶祝の意を表する次第である。

（月見里得知郎）

五五期

平成四年度の関東五十五期会が十月二十三日午後六時から、今回も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

その昔、ともに学んだ学友のこと、先生のこと、先に逝った仲間のことなど、いつもの話題に加えて、木村・戸塚両君の叙勲の話も出て、午後九時近くまで、賑やかに歓談した。

今回の出席者は次のとおり。

石神庸一、木村康宏、武井富夫、戸塚正五、法月重雄、日比光明、矢沢六雄、山本孫一、相川富士雄

（相川富士雄）

六一期

9月18日、東京築地の銀座キャピタルホテルで、61期首都圏在住者の同期会開催。出席者23名。初参加芹沢博樹君、静岡から加藤光成、山内敏雄の両君が出席してくれた。

まず世話役の大石次男、清水照彦の両幹事が挨拶、次いで加藤君が静岡の友人達の動静と幾人かの計報を伝え、全員で黙禱。前回の出席者で、今回鬼籍に入られた方もあり、一同感無量。

若い頃は〃年は誰でも一つずつ平等にとるもの〃と疑わなかった。同い年同士が机を並べて学び、揃って進級していた。だから一年といえど上級生は偉かったし、下級生には大威張りできた。だがこれは大変な間違いだった。年ほど不平等、不条理に押し付けられるものはない。

見渡せば、まるで年を取るのを忘れてしまったような人もいれば律儀に年を重ねてきたような人もいる。油断して一度に沢山抱え込んでしまったような人もいるし、何より先を急ぎ、足早に去っていった友人達のことが残念でならない。

山内君が「大いに参考になった」と、この春静岡の同期会で行われたドクター石垣君の健康談義を紹介した。何しろ医者泣かせの健康体（医者が儲からない）という山内君の要約・意訳だけに単純明快。「人間は上半身と下半身があり、どちらも大切に末永く使え」ということだった。皆羨望の眼差しで聞いていた。

ビールが入って、〃十五の君と僕〃が顔を出し、カラオケも始まる。ご指名で加藤光成君登場。付き合いの広さ、面倒見のよさは抜群、人間大好きで東奔西走している彼だが、根は人一倍シャイな文化人。まずはカラオケ文化を厳しく批判し、さりとて断るのも大人気なしという形を踏んで歌い出したのが文部省唱歌「朧月夜」。叙情豊かに一頻り皆の郷愁をかきたてたあと、全員を引き込んで大合唱で終わらせるという芸の細かいところを見せた。

頭脳明晰のはずが一向人の名前

が出てこず苦吟するA君、黒髪フサフサ「生涯現役」のコマーシャルにでも使いたいようなB君、人生これ迄一つの顔で過ごしてきたような退屈男C君、人生もはやノーサイド終始ニコニコ顔のD君と、六十代半ばの同期会はそれぞれの多彩な人生を重く引きずっていた。

藪崎画伯寄贈の自筆「茶掛」一幅は、お楽しみ抽選の結果伊藤久君の手に。

最後に黒川君のリードで「岳南健児」を合唱。低く、渋く、燻し銀のように輝く歌声が静かに湧き上った。そこには、目を伏せ、少年の頃の高き理想と清き心を熱く甦らせ、一言一言かみしめるように歌う年長けた岳南健児の姿があった。

（相馬　孝）

六四期

七夕の宵、六四期生は例年の如く、新橋の新橋亭に二七名が集いお互いの健康を祝い合った。

還暦を経て、第一の人生を修了し悠々自適のもの、第二の職業につくもの、各人各様の生き方があり話す事に感動させられた。

益頭尚文君…死ぬまで働かないを信条としている。稲見章君…医学的見地より若年者の偏食で栄養失調多し、今後の日本が案じられる。仲野実君…今年六月、九二歳で逝去された父の想い出を語る。山本光夫君…目下老春真最中。鈴木明郎君…憧れは若い女性に接する事。柳田実君…定年迄一生懸命働いたので、愛妻と旅に出たいと思ったら、妻が病気で倒れて行けない。吉井駿亮君…陶芸工房を所沢で開始。望月康逸君…過去のことはすっかり忘れて暮すこと。長島健君…子供達が片付き毎日夫婦でのんびり。松下一男君…朝六時三〇分健康体操を始める。六五歳より大学へ入学希望。栗田行雄君…念願叶って来年銀座で個展開催。加藤満君…毎回元気で皆出席。中村稔君…夕食は自分で作って妻に出す毎日楽しい。塚本光彦君…年金生活二年目、スポーツで体力増強。竹内豊君…来年定年、目下「良寛」の会に入って勉強中。浅井幹夫君…七月七日と十月十日の同期の集いが目下の生き甲斐。神谷武男君…退職後車の運転を開始、ハンドルを握るのが楽しい。村上喜代二君…実父健在、明治三十一年生れ、父の年迄生きたい。山本和彦君…銀座の会社に就職。若い女性に会えて楽しい。岩本吉雄君…昨年軽井沢に山荘を建設、毎月行くのが楽しみ、何といっても女房が一番。渡辺素夫君…妻曰く「一日でも長く勤務して下さい」。名波倉四郎君…ライオンズ会長、静岡県人会理事長。

昭和三十三年より始めたが、皆が元気でいる限り一年でも永く続けたい。

十月十一日、ゴルフ大会を伊豆大仁カントリーで開催。東京・静岡合同で回を重ねて十五回となった。毎度六六期の安田正弥君の御配慮には厚く感謝する次第。今回初参加の蛭川博之君は稲森照男君とは実に卒業以来四五年目の再会との事、その二人が二位、優勝となった。ブービー賞は佐野旭君、メーカーは野澤正憲。

参加者は次の十二名を含め十六名、皆青春を取り戻した感あり。渡辺宏一、新井彰、伊藤剛、永田進一、渡辺素夫、風間政彦、村上喜代二、岩本吉雄、山本和彦、浅井幹夫、神谷武男、大石次男先輩。

来春四月小田急西富士ゴルフ場での再会を約して東西に別れた。

〈追伸〉同期の酒井三到男君が九月二五日逝去されました。つつしんで御冥福を祈ります。

（野澤正憲）

⊙年会費未納の方へお願い――二千円の拠出をぜひよろしく！

富士通電子デバイス特約店・OA機器販社

東海デバイス株式会社

（旧社名　東海電気工業株式会社）

顧　問　清水照彦（61期）

本社　東京都目黒区目黒4-6-33

TEL03-3791-1181㈹　FAX03-3715-1558

回想・随感・近況など

老いのきびしさ

50期　梶原　忠治

我が朋友、永田澂氏が病いに倒れ、やむなく私が原稿執筆を引受ける破目となりました。浅学非才の身、恥を千載にさらす覚悟です。

さて、わが五〇期は昭和五年に入学、昭和十年卒。それから五十年、あの頃の紅顔の美少年も、今やシワだらけの七十五歳の老醜をさらす身となりました。

古き昔をしのぶために春秋二回の同期会を楽しんでおりますが、公務のためとか仕事の都合とかで欠席するのではなく、何となく出るのが億劫だとか足腰が弱って歩行困難、車椅子が必要だとか寝たっきり。なかにはとっくの昔にあの世に旅立ったとか、毎回参加は減る一方で何とか七、八名の参加を得ていますが先細りです。が、それでも集まれば口達者、グチこぼしで結構楽しい会になっております。

歯は欠け、目はかすみ、耳も遠くなり、ボケで嫁の顔さえ識別出来ないのに、何とか理屈はこねて家では大黒柱ぶっているのがいかにも奇妙です。

まあ元気でいる内は会おうということで一報すれば常連がいつでも飛んで来てくれるのが何よりの救いです。

これから先、何年生きられるか最後の香典はだれが出すのか、櫛の歯が欠けるように一人、二人と去って最後の一人となるのは誰なのか、君だ、俺だとギャーギャー騒いでいるうちはよいが、あの元気者がいつの間にか顔が見えなくなり、ポッカリ穴があいて来ると死ぬことは他人のことと思いしにこの身に来るとはこれはたまらぬ。

老人のボケは今日、今のことは忘れても遠い昔の思い出は案外しっかりしているもので、桜満開の入学式のことや、静中の印高の徽章の輝きは今もって忘れることは出来ません。特に先生のアダ名となると皆身を乗り出して、コッピーはどうの、チャボはどうのとケンケンガクガク、少年の輝きをとりもどして来ます。こんな時はやっぱり生きていて良かった、何とか元気で次の会で会いましょうと別れるのです。

先日、私の最も親しき友達の五十期の松崎元彦氏に会のお誘いの手紙を出した処、いまだ見ぬ奥様から丁重な御返事があり、その文面は次のようなものでした。

『静中同期会のおしらせを頂き、まことに有難う存じます。

折角のお招きでございますが、主人は現在入院中の為、残念ながら参加致しかねますのであしからず御諒承下さいませ。

病人は殆んど寝たきりの状態でして口も不自由の上、文字も書けませんので、失礼をかえりみず家内の私が代って御返事したためさせて頂きました。

あの元気な永田様も御病気、主人もこのような状態で、老いのきびしさをいやというほど味わっております。』

人間だれしも長寿を願う、しかし生きていて良かったとしみじみ思うのは、まず体が丈夫な時である。百歳以上が四千人という記事を見て、はたしてこの内の何%が元気な方なのだろうか。

同窓会に出席したいと願いながら、この老いのきびしさ、ほんとうに考えさせられます。

静岡の万葉を歩く（その五）

51期　原崎　郁平

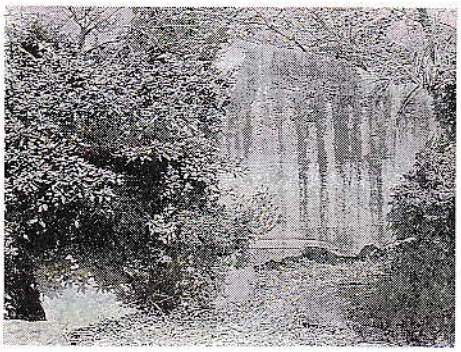
日本平の山頂近くに万葉歌碑が立っている。県営駐車場の下の無料駐車場に隣接した木立の中にある。

水鳥の　発ちの急ぎに　父母に
もの言わず来にて
今ぞ悔しき

有度郡　牛麻呂（巻20-四三三）

揮毫者は静岡の有名な書家青山於菟先生で、昭和三九年に建てられている。高さ約一・五米、幅約二米の石碑である。

歌の大意は「水鳥の飛び立つほど急がしい出立だったので、父母に別れの言葉も言わずに来てしまって今こそ悔まれる」



上部右に読み下し文を小さく刻し、その左に白文が深く躍るように書かれている。その下方に次の言葉が彫られている。

「今から千三百年前、天智天皇の御代に外寇に備えて防人（さきもり）の制を定められ、遠江以東の諸国から壮丁を募って九州方面の防備に当たらせた。その若者たちが郷里に残した父母妻子兄弟愛人らを偲んで詠んだ素朴な歌を、兵部省の役人だった大伴家持が選んで万葉集に載せたものが約九十首ある。県立日本平公園は有度山頂の平原で静岡清水の両市を踏まえ、遥かに東海の天に君臨する霊峰富士を仰ぎ海を山を岬を港を一望におさめる天下の絶景である。この景勝の地有度のあたりから徴されて祖国防衛の任についた防人牛麻呂の哀歌とその父母の愛情とは千古変ることなく、先の大東亜戦争に愛子を捧げた私共を含めて幾百万の遺族の心に通うものがあろうとこの碑を建てたのである。

七十九翁　大石徳四郎
八十二翁　青山　於菟

（碑裏）

上丁　有度郡　牛麻呂
防人歌碑
昭和三十九年二月二十九日建

×　×　×

日本平に「ちゃっきりぶし民謡碑」がある。静鉄バスの終点の前にある日本平パーキングセンターの建物の屋上が展望台になっており、昇った右に堂々と立っている。

この歌は北原白秋先生が静岡の料亭で耳にした女性の会話の一部「蛙が鳴くんで明日は雨ずら」がもとになったと聞いた。歌詞に次郎長が出て来るので明治以降ではあるが、かなり古い歌と思っている人が多いが、昭和二年頃できた歌であるから、未だ六十数年しか経っていない。

民謡碑のことば「唄はちゃっきりぶし男は次郎長で始まる〃ちゃっきりぶし〃は静岡鉄道㈱が昭和二年狐ケ崎遊園地（現狐ケ崎ヤングランド）の開園を記念し、その宣伝のため静岡の新しい民謡の作詞を、北原白秋先生に依頼して誕生したもので、今では静岡県を代表する民謡であるばかりでなく日本の民謡として広く全国の人々に親しまれ愛唱されるものとなり、郷土の観光と産業の紹介、宣伝にも少なからず貢献をして参りました。〃ちゃっきりぶし〃は白秋先生が初めて作った民謡であるばかりでなく白秋詩魂の真髄が躍動する珠玉の名編といえるもので、町田嘉章先生の軽妙芳香を放つ作曲と共に一世を風靡する今日の名声を博したと申せましょう。今やこの〃ちゃっきりぶし〃は私達静岡県民の無形の宝として永く伝え誇ってよいものであり、その誕生四十周年を迎えるにあたりここにその由来を明らかにし、永く記念すべく昭和四十一年ゆかりの地である此処、日本平山頂にその民謡碑を建設したものであります。

ちゃっきりぶし保存会
静岡鉄道株式会社」

三界無安　猶如火宅

54期　庵原　悌次

過日、イスラエルの貨物航空機がアムステルダム空港附近の住宅ビルに墜落し、多数の死傷者が出たことがあった。その時私は、法華経譬喩品の一節を思い出した。

三界無安　猶如火宅
衆苦充満　甚可怖畏
（三界は安きこと無し　猶火宅の如し　衆苦充満して　甚だ怖畏すべし）

われわれの世界は、あたかも火災のために燃焼する邸宅のようなものであり、さまざまな苦しみで満ちあふれていて、非常に恐ろしいところであるという意味だ。

しかし、誰がこのビルに墜落することを予期したであろう。これは偶然に起きたことで、災難にあった人が不運なのだと考えるに違いない。が、この沙婆世界においては誰でも何等かの形において苦難は避けて通ることはできない。

これを観心本尊鈔は〃今、本時（久遠成道）の沙婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり〃と述べて、仏縁を結んで菩提を得るのでなければ苦難から逃れることは出来ないと説いている。

ところが、天台大師は〃無上甚深微妙の法は百千万劫にも遭い奉ること難し〃と、仏縁を結ぶことの容易でないことを述べている。

ここで言う、〃遭い奉ること難し〃というのは、人から聞いたとか本を読んだとかいう機会を得ることがむずかしいということではなくて、経文を読んだり説法を聞く機会があっても、それを〃信ずる〃ということのむずかしさを言っているのである。なぜなら、それは心の問題であるので、頭がよいからとか努力したからといって入れるものではない。智恵第一と言われた舎利弗にしても釈尊は、「汝舎利弗、なお信をもって入ることを得たり」（舎利弗よ、汝は頭がよくて入れたのではなくて、信心があったから入れたのだ）と諭しているのはその事を言っているのだと思われる。

この信ずる心は、どうしたら得られるのだろうか。ある人は滝に打たれたり、坐禅を組んだり、読経したりするが、所詮は縁ではなかろうか。周梨槃特や熱原甚四郎を見ると、一念の心、妙不思議なることを思い知らされる。

こう考えるとき、私は、見宝塔品に見る〃此経難持〃（此の経はたもち難し）の真意に触れた気がするのである。

懐かしき母校よ　静岡よ

55期　野中　篤

昭和廿三年から、小生は東京に住んでいる。最近やや歳のせいか母校および故郷を懐かしく思う心が増し、この点では誰にも負けないと自分で勝手に思っている。

一体母校とは何であろうか。それは日々の暮しの中で、ふと口ずさむ校歌や、殆ど亡くなられた恩師の面影、青春を国に捧げて戦争で散華した友の顔など思い出し、我にもあらず胸が熱くなって、眼がジーンとくる――母校とは言って見ればそんなもの。母校への思いとは所詮、理屈や議論をこえた心の底の、ある暖かい感情としか言いようのないものであろう。

そこで静中時代の一端を偲んで見ようと思う。私は五五期卒業、昭和十年四月入学、同十五年三月卒業である。

昭和十二年頃からは、日増しに戦時色濃厚となり、戦時下ということで、種々の規制が行われ、喫茶店はおろか、そば屋や氷屋へ入ることも堅く禁じられた。

戦時下だ喫茶店へは入るなと
きびしく言いしチイチ先生

三年生の頃、長谷通りのそば屋「山惣」等へ時々数人で入った。小生は自称悪童の大将であった。その時食べたそばの味は摘まみ食いをするのと同じスリルがあり、大変にうまく今も忘れられない。

そして「チイチが来た」「ブーカンとコッピーだ。モッチイも来た」とおどかしあったのも、今はこの上なく懐かしい思い出だ。（勿論この時、右の先生方は実際には来ては居られなかった。）

カバン下げゲートル巻いて
通いたる
木造校舎今はなつかし

当時はこの上なく粗末な二階建

の木造校舎であったが、県下一の中学校を卒業したことを、私は感謝している。

さて、小生静岡に居た頃は、何となく静岡弁は嫌で、殆ど使ったことはなかった。しかし今は違う。現在は家内と二人きりの生活で、家内は東京生れの東京育ちである。小生最近は好んで、朝から晩まで静岡弁を使う。「明日はデパートへ行かザア、きっと天気もいいズラ」「君あまりソラを使うなよ」「この魚、おいしいジャン」「あまりオチャラカスなよ」等々である。家内は「あなたは私と一緒になるまでは静岡弁を一度も使ったことがなかったのに、今は随分使うようになったはネ。段々地が出て来たのかしら」等と言う。

小生が静岡が懐しく、わざと静岡弁を使って、故郷を懐かしんでいるのだと言っても、仲々本気にしてもらえないのである。今では静岡弁は使うほど味があるし、これを使うことにより、無意識のうちに故郷を懐かしんでいる自分を見出すのである。

友の顔師の顔若き日その儘に
こぞの日のごと思ひ出さるる

今、私はこの思い出の記を書きながら、殆ど亡くなられた恩師の方々に感謝し、また先に小生本会報に書かせていただいた如く、特攻隊指揮官として、壮烈極りなき戦死を遂げた小学校以来の親友、金子保君や、其の他、辻本、石丸、見崎、牧田、梶山の諸君など青春を国に捧げて散華し、現在の平和を齎してくれた友や、不幸にして病に斃れた友に感謝し、懐かしき恩師や友の顔など、静中時代の若き姿のそのままの微笑顔が、走馬灯のように次々と浮かんで消えることがないのである。

最後に、私事にて大変恐縮ながら、小生の実父、渡辺弘（英語教師で教頭、通称ラッツアン、またはラッキョー、大正初期から昭和五年まで母校に勤務。因みに小生は母方の祖父の家を継いだため野中となった）のことを、先輩諸氏の中で思い出して下さる方が一人でもいらっしゃれば、大変幸いです。

静岡の呼び名懐かし
はるかなる
若き日の君思い出されて

台湾から帰って

60期　井田　淳

我々六十期卒業生も、大半が今年満六十五歳を迎えたはずである。理由は判りませんが、六十五歳以上を老人としているとのことで、私もいよいよ老人の仲間入りしたことになる。役所から老人手帳が届いた時には、すっかり戸惑ってしまった。

敬老の日前後には高齢化社会となりつつある日本の話題を含め、我が同年代の新老人をスタジオに集め、また家庭訪問をしたりして盛んにTV番組にとり上げていたが、老人を意識せよと言わんばかりで何となく抵抗を感じたりもした。

昨年九年間の台湾勤務を終え帰国したので、浦島太郎だと言うこともないと思うが、間が良過ぎた。

四月十八日の静岡での同期会と六月十九日の関東同窓会には、懐かしさの余り、都合つけて出席した。旧友誰しもが間違いなく壮年そのものであることが嬉しく、特にガヤガヤしているうちに静中時代の顔になって来るのが不思議であった。

十月始め、上杉君から電話で、「何でも良いから投稿しろ」とのこと、作文の不得手な私であるが、留守中何かとお世話をかけたこともあり、お断り出来ず引受けてしまった次第である。

元々製造現場に馴れた私が、一寸した業務の都合から海外に関連した仕事を担当するようになり、海外出向する羽目になった。昭和五十七年に勤務先の台湾にある輸出拠点の家庭電気製品の製造会社に赴任し、昨年七月まで台湾生活を続けたのである。

中国との国交開始と同時に、台湾にある中華民国政府と断交となった日台間の関係は、民間ベースの経済関係のみ残ったが、この交流は年々拡大し今日に到っている。中国にある政府と台湾にある政府は最近こそ雪どけを思わせる動きも見えるが、私の渡台当時は日本人として気を使うことがまだまだ多かった。

転出手続きに役所で転出先を中華民国台湾省と記載したところ「中華民国という国はありません」と言われたり、赴任後は私の旅券に中国へ出入国記録が多いため、旅券を更新した方が良いのではないか、と現地人幹部を心配させたりで、あまり気分の良いものではない。

中華民国を認めている国が三十ケ国そこそこの状態ではもっともであったと思う。しかし一般的には日本企業や日本人に対して好意的で、仕事も日常生活も快適であった。

過去十年間の経済発展は、申すまでもなく非常に目覚しいもので、経済成長率、工業生産指数等の指標は、アジアのトップクラスを確保し続けており、特に外貨準備高については世界一、二位の記録を誇って来ている。

最近では日本のバブル経済にも似た国内景況を呈したが、現在は沈静化している模様である。米国との貿易不均衡、外貨準備高是正など、米国の圧力に先立った経済金融開放、更には国内需要促進を兼ねた国家建設プロジェクト等実に対応の早いことには感心させられた。国家としての経済力の自信が、五年前の戒厳令解除、一九九一年の台中間戦争状態の終結宣言となったのだと言われている。

台湾での毎年一、二回の防空避難演習を始め、高校生の国防色の制服姿、登下校時の校門衛兵当番などは、我々の中学時代を想い大変なつかしいものであった。現地の学生生徒の整列行進は残念ながら今の日本の学生より大分優れているように思う。時代の差をつくづく感じたものである。

まだ当分は徴兵制は続くであろうが、企業にとっては毎年の定期的な採用が出来ぬこと、兵役中にややもすると学力が低下してしまうこと等不都合も多く、日本がいかに恵まれているかも実感させら

れたことである。

いずれにせよ未だ建設途上にある台湾にはバイタリティーに満ちた日が続いて行くことであろう。

季節の変化は少ないが、春そのものの冬季と、年中つぎつぎと実る南国のシーズンフルーツの味覚は、これからも忘れられないことと思っている。

実用新案二つあれば特許がとれる

61期　清水　照彦

兎角年をとると自慢話しをしたがるものですが、六十四歳になって、特許がとれたことが嬉しくてまた皆様の参考になればと思い、書き綴る次第です。

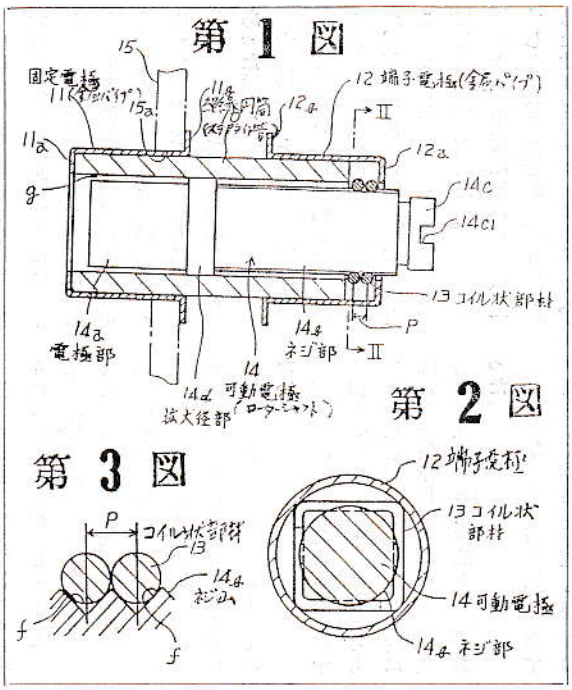
私は昨年暮に半導体商社と電子部品の製造に従事している小さな会社の社長をやめ現在は隠居の身ですが、昭和五十九年六月（一九八四年）に電子部品の特許出願を致し、平成三年三月（一九九一年）特許公報に掲載（この日から十五年間の特許が成立）され、正式に平成四年四月（一九九二年）特許証の公付がありました。この間足掛け九年の歳月が流れました。その経過は次の通りです。

昭和五十九年六月　特許出願、
同時に審査請求特許設定登録
平成二年七月　拒絶理由通知書
同年八月　意見書並に手続補正書提出
同年十二月　特許公告決定通知書
平成三年三月　特許公報掲載
同年九月　登録査定、
特許料の納付
平成四年四月　特許証の公付

この特許が成立しました電子部品はトリマ・コンデンサーというものです。これが使われている製品はテレビゲームで、今日任天堂対セガー・エンタープライゼス・ファミコン戦争といわれている十六ビットファミコンのヨーロッパ向け部品（RFモジュレーター・周波数変換装置）としてファミコンの機器に組込まれているものです。

この特許は取引先からの要請があり仕事の合間に一年かかって考え作り出したものです。大した発明ではないのですが簡単な構造ですので、当社がお願いしている弁理士さんに相談したところ、一つの部品に実用新案二つあれば特許になるということで企業防衛上、特許を出願したわけです。

このシリンダートリマ・コンデンサー（円筒形可変コンデンサー）は周波数の調整用に古くから製造されている回路部品LCRの中のCに相当するものです。この構造（図面参照）は筒状になったステアタイト管の外壁の先端に金属パイプ（固定電極）を圧入し、内壁にローターシャフト（可動電極）を出入りさせることによって静電容量を可変させるものですが、私の作ったシリンダートリマ・コンデンサーは従来のものと比較して半値で作れる様に致しました。その特許となる二つの実用新案の一つはトルク機構とローターシャフトを保持するために、多角形（実際は四角形）のコイル状のバネ材一ターンしたものを、金属パイプ（端子電極）に内接させてステアタイト管（絶縁円筒）で圧着固定し、その部分にローターシャフト（可動電極）のネジ部分を挿入、螺合接触させたものです。ローターシャフトが回転するとそのネジ部分がコイル状のバネ材に接触移動することにより一定のトルクを出す様考案した点であります。二つ目は部下の発案協力によるところが多いのですが、ローターシャフトのネジ部分と電極部分の間に鍔（拡大径部）を設けて、ステアタイト管の内壁をローターシャフトが移動する時にこの鍔によってローターシャフトが同心的に位置づけられ、〃容量とび〃をなくした事であります。



お分りにくい点があったと存じますが、要するに特許を折角とっても実用に供されなければ何もなりませんので、衆知を集め、従来の供給品に対し半値に近くなるようにすることと実用新案的な考案が一つの製品に二つあれば特許がとれるということであります。

私の散歩道など

63期　白鳥　芳夫

此の度は私の住居地である板橋区赤塚周辺の歴史にまつわる所など、私の散歩道を御紹介する。

交通の便としては、池袋始発の東武東上線「下赤塚」駅北方の、歩いて七、八分の徒歩圏に私の家はある。その下赤塚駅北口を一直線に進むと通称松月院通りに突き当るが、この界隈に史跡、旧跡が数多く散在しており、また自然が残されている。

松月院通りの起源となった松月院は、赤塚城主千葉自胤が延徳四年（一四九二）寺領を寄進しこの寺を菩提寺と定め、寺号を萬吉山宝持寺松月院と定めたと寺の記録に残されている。また、江戸時代

の天保十二年五月九日「高島平」の地名の起源となった高島秋帆が、徳丸ヶ原で砲術訓練を行なった前夜、当寺を本陣として宿泊した関係でその遺品や、千葉氏の寺領寄進にならって徳川家康以下歴代将軍からの御朱印が保存されている。墓碑の間を縫って歩くと、有名人の墓碑が発見されるが、私の少年の頃、映画などでも紹介された「次郎物語」の著者下村湖人の墓碑なども発見し、懐しく想い出される。

松月院より更に北に進むと、赤塚山「乗蓮寺」が見えてくる。

ここは最近では東京大仏の名で知られているが、嘗ての赤塚二の丸跡地であり、板橋信濃守忠康の墓がある。最近では、天気の良い日曜日など、大仏様を拝観に来る団体さんなどで賑わっている。

乗蓮寺の前を更に北に進み植物園を通過すると区立美術館を見る事が出来る。

この美術館で催される各種展覧会もまた楽しいものがあるが、隣接敷地内にある「赤塚溜池公園」は私の心をなごませてくれる。

ここはそんなに大きな公園ではないが、その名のとおり池があり、小さな滝から流れ込む溜池の中には、多くの魚が泳いでいるのが見える。そして池の周辺には、釣り糸を垂れる釣り人達で賑わっている。そんな公園の片隅でベンチに腰を掛け、散歩で疲れた足を休め、可憐に咲くコスモスの花にそっと呼びかけてみるのもまた楽しいものである。

日本の四季は、各季節ともそれぞれ楽しいものだが、私は何故か秋が一番好きである。

この原稿は私の書斎で書いているのだが、机の片隅に積んであった春秋詩編と題した私の幼ない詩作品を記録したノートの中に、千九百四拾七年拾月廿日というから、私が十八歳の頃書いた〝秋の雨〟と題する詩があったので読んでみた。拙いものではあるが、その一部を紹介させて頂く事とする。

〝秋の雨〟

秋の夕にしぐれ暮ればたゞ悲し
しのび寄る風の音も木の声も
遠く去り行き
見送る我が眼にかすみ行けば
浮泊の思いに心うずく

○七夕の夜空に開くボタンかな
○夏空に音と光のコンチェルト
○浴衣掛け川面に落ちる花火かな

散歩道　ライトに浮かぶ水踊り
心は一つ　虹のかけ橋
あの人がいる　それだけで倖せと
しめつけられる　胸のせつなさ
おぼろ月　寄せては返す白波の
心は知れず　沖の彼方に
渚にて　語りし時はすでに無く
残るは砂の舞上がる跡
言えばよし　言わねば知れぬ恋心
誤解はとけず　闇の又闇
手を振り　愛を確かめ安堵する
又逢える日は　夏の終りか
クリスマス添遂げられぬ悲しさを
涙でゆらす　イブのローソク

俳句・短歌

64期　山本　光夫

○七夕や想いを刻め短冊に
○星空を見上げて悲し天の川
○目が逢いて胸高鳴らし星祭り

老半導体エンジニアの夢

67期　向井　久和

年をとると、昔話がしたくなったり、勝手な講釈がしたくなるものである。年寄りのたわごとを許していただきたい。

私は長年半導体の研究開発に関係してきたが、この半導体の世界は、トランジスターの発明に始まり、特にIC（集積回路）が世に出た一九六〇年代初頭からの三十年間に、驚異的な進歩発展を遂げてきた。この間の進歩は集積度あるいは価格で一千万倍に及ぶ改善を実現した。そしてコンピュータや電気通信の発展を促し、情報化社会をもたらす鍵になったことはご存じのとおりである。

その半導体技術の進歩はほとんど直線的（対数グラフ）であり、そのトレンドカーブは、そろそろ飽和するのではないかと言われつつ、伸び続けてきた。飽和を予測して別の手を考えるといつも空振りになってしまうのが、過去の例であった。それでは、このトレンドカーブの昔話は今後も変わらないのであろうか。

ご他聞にもれず半導体産業も不況のどん底にある。過去、半導体産業にはシリコンサイクルと称する四年周期の景気変動があった。オリンピックの年であり米国大統領選挙の年は景気のピークになる年であった。ところが、今回は谷間の一九九〇年に始まった不景気が今なお続いている。また、技術的な困難さ、それは微細加工技術が極限に近づいたことと微細化がデバイスの動作メカニズムに影響するようになったことによるが、この困難さにより開発投資・生産設備投資が今後一層膨れ上がる。他方、製品価格は下がるので、半導体産業は構造不況に入るのではないかと危惧されている。

そして技術論としては、二十一世紀の始め頃LSI技術が限界に達した後のポストLSIとして、何が出てくるのか、と言った議論がなされているが、今のところ何も見えていない。確かに半導体産業は変換点にきており、過去の議論は通用しないことを思わせる状況にある。

半導体産業の構造不況への対応策としては、グローバル的な共同開発や分業による投資の削減、製品のライフサイクルを長くする、経済化を可能とする生産技術の開拓、LSI内の機能を高めることによる付加価値の増大等、多くの対策が現在考えられている。

そしてまた、応用技術の開発の努力による新しい市場の開拓が進展すると考えられる。二十一世紀は、情報化社会が一層高度化し、人間性豊かな感性の時代になると言われているが、半導体技術および産業がその転換期を乗り越えて進歩・発展し、そうした新しい社会の実現に貢献することを期待したい。

それでは二十一世紀の半導体技術はどのように実現されるのであろうか。製造技術はこれまでの経験的に体系化されてきたものから

進化して、ウルトラクリーンで原子レベルまで制御された微細加工技術となる。これにより集積度は極限的に高まるが、問題となるのは消費電力あるいは動作エネルギーの増加である。この加工技術で実現される微細デバイスには、もはや現在のトランジスターの原理は適用できない。新しいデバイスは極小エネルギーで動作することになろう。ここでデバイス間を接続する配線が問題となる。現在でもLSIチップ上は配線のお化けであり、信号伝達のためのエネルギーが大きくなり苦慮しているところである。この傾向は今後ますます増大するであろう。このことを考慮した機能複合化デバイスの技術、また、配線を最小化するようなシステム技術あるいはLSIアーキテクチャーの展開が一つの鍵となると思われる。

この様にして、半導体技術および産業は二十一世紀においても依然として進歩・発展を続けるであろうことを期待したい。

（沖電気工業㈱取締役・技師長）

東大工学部卒業後NTT電気通信研究所に勤め永年LSI研究に没頭、その間米航空宇宙局（NASA）から勧誘を受けるほどの成果を上げて現職に至るが、今なお現役として精励を続けている。

工学博士向井久和の名は斯界では世界的レベルにある。

山形路
オシャベリ同級会
68期　荒谷じつ子

在京女子四人のひとり酒井（旧上山）さんが御主人の転勤で山形へ去り二年過ぎたので、女だけの同級会をやりましょうと三泊四日の山形路めぐりとなりました。

十月二十一日、杉山（旧湯沢、静高二十年勤務湯沢先生の妹）、宇田（旧土屋）、荒谷（旧竹下）の三人で新幹線つばさにて山形へ……。

優等生の酒井さん、宿の手配から電車の指定席、最上川舟下りの切符から弁当までととのえて、駅まで車で迎えてくれた。お嫁さんのお産で二歳九ヶ月のお孫さんをあずかり、子守りをしながら紅葉の蔵王を案内してくれた。

ロープウェーで頂上の地蔵まで登り、温泉街まで紅葉を満喫しました。

山形厚生年金休暇センターで温泉を楽しみながら一泊し、二日目は紅葉の最上川舟下り。好天に恵まれ、お孫さんと五人で弁当を食べながら楽しいひとときを過しました。タクシーで酒田に出、元気一杯の三人は本間家のすばらしい美術品、お庭、建物を拝観し、出羽大橋で飛来したばかりの白鳥のむれを見ながら土門拳記念館まで歩き通しました。子守りの酒井さんは途中で宿に帰り、夜はつもる話で時を忘れました。

三日目は山形にもどり、酒井さんの車で山寺、風雅の国、上山城を見学し、山形県観光物産会館での土産買いと、至れり尽せりの案内ですっかり満足し、明日も午前中はと気を使う彼女に、有難うと最敬礼してお別れしました。

四日目は三人で米沢に行き、すばらしい杉木立にかこまれた上杉家御廟所、紅葉美しい松岬公園で上杉鷹山の業績・人物を知り、笹野観音の古式日本建築美、茅葺屋根に感激しました。

同級生の良さは、何も気兼ねなく言いたいことが言え、貧しい時代に育ち価値感が同じでツーカーの仲。三人で姦、更にひとり加わってよくも話が続くと感心しながらの四日間でした。

雑感
74期　藤原　経史

平成四年のカレンダーも残り少なくなり、また年の瀬を感じる頃となります。

一年ごと、月日のたつのが早くなり、自分なりに年をとって来たと思うようになる近頃です。

七四期生の皆様も元気で頑張っております。

チャーチルの言葉に、「過去をさかのぼれる人は、未来が見えてくる」とあります。最近世の中が不透明とか、予測が出来ないとさわいでおりますが、もう少し我々の足元といいましょうか、歴史を大切にしたいと思います。

物事にはすべて始めがあります。その始めが歴史であります。国の始め、家の始め、自分の誕生、会社の始め、仕事の始め、……。

すべて始める時には、その人なりの思いがあって成り立っているわけです。歴史を知るということはその人の思いを知ることです。

この静中・静高同窓会も、諸先輩の思いがあって出発したはずです。

この歴史を大切にしつつこの会が継続して、生成発展することを願う一人です。そのためには、会員、我々一人一人が、それをささえることが大切と思います。

新年の平成五年を、また新たなる気持と思いをもって迎えたいと思います。

数学と私（3）
88期　山野　武尚

――一松（ひとつまつ）信先生こんな事

今回は現存の数学者、一松信先生を挙げる。

先生は数多くの著書を書かれているが、理工系へ進んだ者は、先生の「解析学序説(上・下)」にお目にかかった事であろう。

先生は、大正15年3月6日東京で生まれ、一高から東大理学部数学科へ進まれ、立教大・東大を経て、昭和44年から京都大学数理解析研究所教授となり、平成元年停年退官されるまで20年を京都で過ごされた。現在は京大名誉教授であり、東京電機大学教授でもある。

先生の著書との出会いは、大学二年教養部在籍の時であった。前述の「解析学序説」であるが、上巻の方はあまり読まなかった。私は一年の時から、学部の解析学の講義の参考書として、高木貞治先生の「解析概論」を読んでいた。二年になって多変数函数、特に重積分の勉強を始めると、一松先生の「解析学序説」（下巻）は効力を発揮した。高木先生の本は書き方が古めかしいが、一松先生の本

は現代的に書かれていた。中でもシュワルツの提灯（Schwarz's surface）が、今でも記憶に残っている。これは曲面積の定義を「内接する多面体の表面積の極限」とすると、極限のとり方によっておかしな例がでてくる有名な話である。詳しくは、先生の著書「解析学序説下巻（新版）」（裳華房刊）の「10重積分の項　§5曲面積」を参照されたい。

次に出会うのは学部へ進んでから、函数論の講義のテキスト「函数論入門」（培風館）である。

大学を卒業し名古屋の高校へ奉職したが、二年で退職。以後、計算機の職種に転向するが、数学をどうしてもやりたいので、東京浜松町にある世界貿易センタービル7Fの情報処理開発協会のIITで、昭和58年1月、先生の「数値解析入門」の講義を受けた。そこで、先生に「京大数理解析研究所で、どうしても勉強したい。」と申し出ると、「会社から行かせてもらってはどうかね。」と言われ、私が「小さい会社なので、そこまでは」と返事をすると、先生は、「京大数理解析研究所で仕事があるので、私から推薦してあげてもよい。」と言われた。この先生のお言葉は結局実現しなかったが、私の生涯を支える言葉となり、長い間このお言葉に支えられてきた。でも、このお言葉に一番支えられたのは、私の母ではないかと思う。私の父を昭和55年3月に亡くし、私が名古屋を辞めてから、「数学をやらせてくれ」と言い続けてきたのが、この先生のお言葉でピタリと止ったから……。

次の先生との出会いは昭和59年7月。この年の4月に日本電気の主任の推薦で、情報処理学会正会員となり、数値解析研究会のメンバーになったからだ。先生は研究会の主査をされていた。

そしてこの年の秋、京大数理解析研究所で数値解析研究会の発表があり、私も参加した。先生は会場の前で出席者に挨拶されていたが、私が会場の中に入ろうとすると、先生は、「君は入ってはいけない」というような表情をされていた。先生が推薦してくださるとおっしゃっていたので、この時私はどうして中へ入ってはいけないのか、これでは京大数理解析研究所へ来た意味がないのではと思い、さっさと会場の中へ入ってしまった。

この時の発表は、案外おもしろいものだった。私はこの席で、京大数理解析研究所の研究員である磯裕介氏に目をつけたのですが、最近の先生からの便りでは、氏は案外興味ある話しをされたとある。

次に、昭和60年2月、同じく世界貿易センタービル7Fで開かれた「特殊函数と数値解析」という題目の先生の講義を受けた。この講義はおもしろく、特殊函数への引き金となり、研究したい分野の一つに入っている。先生からこの講義について、「実は約30年前、東大の物理学専攻の学生に教えた講義を元にして作った」という説明が、後で文書であった。

この頃から先生との文通が始まり、学問的にもアドバイスを受けるようになり、私の数学観が深まっていった。京大御在籍の頃はよく手紙を頂いたが、中国に講義にお出かけになった際、足を骨折され、治っても以前のようには無理がきかなくなったようである。東京電機大学に移られてからは、多くの学生を相手にお忙しいようで、なるべく手紙を出さないようにしている。

平成3年の夏には返事を頂いたが、平成4年には音沙汰がないので、どうされているかと心配である。幸い先生の奥様から便りがあり、先生の事については何も書かれていないので、ひとまず安心。

先生のお元気なお姿を、また拝見したいものである。

（㈱ソフトウェア技研勤務）

第45回江の島会

若干涼しさのもどった9月6日、江の島の恵比寿屋で33名が集まって開催された。

会は佐伯正剛会長（51期）から「江の島会も会を重ねて45回となり、集まる年代も三世代にわたる広範囲でユニークな会である。世代、年齢の開きがあっても打ちとけて、何かしら役に立つ会としたいし、神奈川県在住者ばかりでなく、より広範囲で、静高卒業生が気楽につどい、楽しさ一杯の江の島会としていきたい」との挨拶から始まった。

遠藤久弥同窓会常任理事（45期）や甲木怜先生（79期）から、百二十五年記念大会について説明があり、平成15年の実施に向けて、皆さん方のご意見を伺いたいと話をされた。

続いて中野母校教頭から母校の現状について「文武両道」をキーワードに活動を行っている旨を話され、出席者一同、最新の母校の状況を興味深く聞きいった。

続いて平山桂氏（43期）から関西の、成岡英彦氏（67期）から関東の各々同窓会の活動状況が話された。

続いて議事に入り、事業報告、会計報告等が行われ、全員一致で承認された。

第2部は席を移し懇親会となった。校歌斉唱、平尾鋼之輔氏（37期）の音頭で乾盃のあとは、佐伯会長のお話しのとおり、世代、年齢を超えた集まりが出来て、まじめな話やら、やわらかい話などに花を咲かせた。

その席上、永野清名誉会長（35期）から江の島会設立の経緯などについて次のような秘話が披露された。

「昭和22年頃と思うが、私の娘が県立藤沢高校に入学したので、私が学校に挨拶に行った。

その時の副校長が村松直氏（42期）で、話をしているうちに静岡県人でしかも静岡中学校の卒業生だということがわかった。

それで最初は藤沢市付近在住の静中出身者4～5名で毎月一回食事をしたのが始まりである。最初のメンバーには、当時平塚市長だった戸川貞夫氏（27期）もおられた。

その内にこの話を聞いて各期の人達が集まり、李家孝氏（27期）を会長として、江の島会規約等を作って活動をしてきた。

最盛期には50名以上の同窓生が集まったと記憶している。

その後会長は、村松直氏から佐伯正剛氏へと受け継れたが、この江の島会が益々発展し、盛会になるように祈っている……」と。

これらは初めて聞く話であるので、江の島会をご存知ない岳南健児もおられると思うのでご紹介する次第である。

恵比寿屋さんでの会がお開きの後は屋台いそみで、恒例の夕陽を眺めながらの懇親が続き、一同なごりを惜しみながら、再会を期して散会した。（68期　雨宮明生）

静岡だより

中央公民館→アイセル21

お知らせするのが遅くなってしまいましたが、あの懐かしの「中央公民館」が取り壊されて、今年の六月に新たに「アイセル21」として生まれ変わりました。

〝懐かしい思い出〟と一口で言っても、人それぞれで思い出の味はきっと違うことでしょう。ある人は放課後の勉強のために、図書室（あるいは学習室とも言いましたが）で参考書を開いていたでしょうし、またある人は城北高校の女生徒とのデートのための待ち合わせ場所にして、二人づれで大やきいもやおでんを食べにいったりもしたことでしょう。

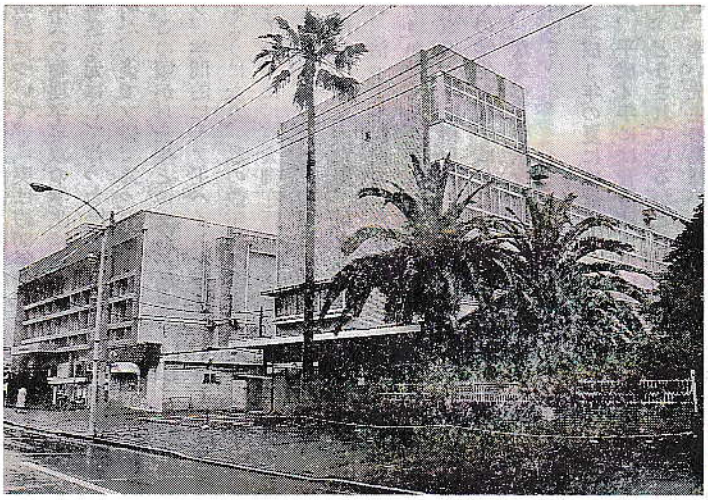
最近ではすっかりオンボロになってしまい、十七歳の頃の思い出を蘇らせるには切ないほどでしたが、それでも側を通るたびに胸にキュンと来るものがあったことも事実でした。

隣の県職員会館（庭に椰子だか棕櫚だかの木があって、時々バーベキューをやったりしていましたね）は、数年前に一足早く「静岡県職員会館＝もくせい会館」として、元の中央病院のところに新築移転していましたが、今回の中央公民館の新築によって、東草深のあのかいわいもすっかり雰囲気が変わってしまいました。

ご参考までに、今まで中央公民館と県職員会館があった時分の写真と、同じアングルでの現在の写真を添えますので、昔を思い返しながら比べてみて下さい。

新しい施設「アイセル21」は、女性会館（従来の婦人会館というネーミングでは、既婚女性だけと勘違いされるとの懸念からこうなったとのこと）と中央公民館の複合施設で、鉄筋コンクリート造り地下一階、地上四階建ての立派な建物で、延べ床面積は約七千八百平方メートル、総事業費は五十億円近くかかったそうです。

地下は乗用車三十五台を収容する駐車場で、一階はホールと情報・国際交流コーナー、二階は料理



←中央公民館と県職員会館

アイセル→

実習室と軽運動室、三階は大音楽室と集会場、四階は研修室となっています。特に、男女共同参加型社会の実現も一つのテーマでもあることから、会館内には女性関連の書籍約五万冊が所蔵されているとのこと、静岡にお越しの節は、ぜひ一度訪ねられたらいかがでしょう（例の大やきいもも、すぐ近くで営業中ですよ）。

名前のアイセルは、市民が愛せる施設になってほしいという語呂合わせと、活動・情報・相談・交流・学習のそれぞれの英語の頭文字から命名されたとのことです。ひとつ学生時代に戻って、それぞれの単語を考えてみて下さい。

ちなみに「アイセル21」についてのお問い合わせ先は、静岡市の女性青少年課です。

TEL（054）254－2111

（85期　吉水　廣）

野球部の健闘を祈って

秋季高校野球静岡県大会は、一回戦敗退で、春の甲子園はおろか東海大会にさえ及ばないという大変残念な結果になってしまいました。

前号でお知らせしましたように春から夏にかけては、静高・静商ともに調子が良く、久し振りの伝統校の活躍に、我々OBの野球談義にも花が咲いていたのですが、尻すぼみの感で残念です。

静高は中部4位、静商は中部5位で何とか県大会に駒を進めたものの、共に一回戦で姿を消す結果となりました。

静高は東部2位の御殿場西との対戦で、8回まで4－3とリードしながら最終回に追いつかれ、結局11回の裏にサヨナラ負けを喫してしまいました。

秋季高校野球静岡県大会一回戦

静高（中部4位）	1	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0									4
御殿場西（東部2位）	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	1	X								5

注目の〝東海切符〟は、優勝した浜松商と準優勝の静清工、そして3位決定戦で勝ち残った御殿場西の3校が手にしました。

最近では、春の甲子園行きこそはあと一歩で逃しているものの、最低でも東海大会には出場している静高にとっては、久し振りの低い成績と言わざるを得ません。

情報不足の中で敢えて新チームの戦力を分析するなら、こんな感じになります。まず投手力は、志村・松永の両輪でそこそこに抑えられると思いますし、打線も上位があたっているので、前チームに比べて極端な戦力ダウンとはいえません。ただし、試合運びや勝負への執念の点でまだまだ物足りないというのが実感です。

この傾向は前述の御殿場西との試合に顕著に現れています。先発で6回途中まで投げた志村の自責点は0、リリーフで5回を投げた松永の自責点は1です。それなのに5点を取られてしまったということは、いかに守りが不安定だったかを表しています。

ちなみに、4－3とリードして迎えた9回の裏には、死球を足掛かりに3塁までランナーを進められ、スクイズで同点に追いつかれた訳ですが、この間御殿場西はノーヒットでした。また、11回の裏にはツーアウトまでいきながら、四球とヒットで満塁にされた挙句に、何とタイムリーエラーでサヨナラ負けを喫してしまいました。

これは、前々から（人によっては伝統的に）言われ続けたことですが、どうも静高は持てる力を十分に発揮できない精神面の虚弱さがあるように思えてなりません。

その対極にあるのが、今回優勝した浜松商です。上村監督の表現によると「60点のチーム」という戦力で、実際に西部地区大会では緒戦敗退から敗者復活戦で何とか西部4位に這い上がったほどでした。

その浜商が県大会に臨むと、県下ナンバーワン投手の評判が高い村越を擁し優勝候補の筆頭に挙げられた磐田南（西部1位）の動揺につけこんで、四球や犠打を足掛かりに得点を重ね、ついに下してしまいました。

専門家がみれば、戦力は静高が上というかも知れませんが、結果としては県大会優勝校と一回戦敗退校という対比になってしまったわけです。

そう言えば―との思いが、OBの方々はお持ちになっていらっしゃるのではないでしょうか？　強ければ強いなりに（県大会でも甲子園でも）勝ち進むものの、もう少し上に行ってもよかったんじゃないだろうか―と感じ、弱い時には全くあっけない負け方で、今年は弱いとは聞いていたがいくらなんでも―と感じてしまうような、いわゆる歩留まりが常に掛け算されてしまうような傾向があるように思えてなりません。

しょせん素人のたわごとだよ―と言われてしまえばそれまでですが、ほとんどのOBが素人なんです。その素人が「うん、この戦力でよくがんばっているな」と応援にいつも以上に力が入るようなチームを目指してがんばってほしいと切望します。

（85期　吉水　廣）

近鉄・赤堀投手（105期）二冠獲得、おめでとう！

今年度パ・リーグ投手部門で、赤堀元之投手（105期）が最優秀防御率（一・八〇）と最優秀救援（32セーブポイント）で見事二冠をつかんだ。防御率一・八〇は七六年の村田（ロッテ）の一・八二を抜き、パ・リーグが七五年に指名打者制を採用して以来、最高の記録である。

静高在学中の赤堀投手は二年生の夏、第69回甲子園大会に出場し初戦関西高校戦で救援投手として登板したが、6－2で敗退している。また三年生の夏は、エースとして甲子園へ連続出場を目指したが、県大会初戦で静岡西高に延長11回で5－4のサヨナラ負けを喫している。あの選手がまさかこの大記録を達成しようとは、誰も予想出来なかったであろう。

静岡新聞の記事を紹介する。

『投手は人が良くては務まらないとも言われる。しかし、周囲への気配りにたける童顔の赤堀は、一見脆弱さを漂わせながらも、向こ

う気の強さで最優秀救援に加えて防御率の2タイトルを手中に。「まだプロ四年目なのに、信じられない。よく肩やひじが最後までもった」というのも、入団時の目標が「四年以内に一軍入り」だったのだから無理もない。』

この快挙も、そもそも近鉄のスカウト小田義人（82期）が、ひじの使い方の柔わらかさを見抜いて八八年度ドラフトで四位指名をした慧眼が効を奏したのであり、野球部OBの先輩・後輩の強い絆と因縁を感じる。

三年生の夏の大会の屈辱を糧として、ここまで成長した赤堀投手に拍手を贈りたい。夏の大会敗退後も、走り込みを主体にウエイトトレーニングで体を鍛えるなど、将来を見据えた本人の精進がようやく結実したと言えよう。

因みに、赤堀投手と同期の野球部主将だった駒大四年の天野義明選手は、今年、全日本大学選抜チームの主将として日米大学対抗戦に出場、その重責を果したが、彼もまた赤堀投手と同じ想いで励んで来たことは間違いないだろう。

両選手の活躍が、低迷気味の母校野球部の奮起のカンフル剤となることを願ってやまない。

（編集委員）

平成四年度会費拠出者

（順不同・敬称略）

平成4年4月1日～4年10月31日

四二　井出多米夫、国分友英、中嶋敏、吉田幸一

四三　倉沢栄吉、西沢純三、三好由三郎、山村忠雄、小河直人、望月孟夫、吉江誠一、平山桂、見原三郎、北里良夫

四四　臼井茂、村井東助、増井三郎(3)、高橋真一

四五　草野哲、田附敏三、鈴木弥門、石上稔、下川猛、竹下定吉、柏木千秋、速水基夫、遠藤久弥

四六　青木清明(5)、篠原清、久留武、磯塚倫三、鼠入秀夫、山本幹夫、田中修三

四七　杉山栄一、関口不二夫、星野三郎、上田次郎、今関智吉、片山正二、田中達夫、土井知恵雄(4)、山上信重

四八　近藤希賢、河村祥、大橋広世、原崎進一、伏見賢治郎、青木香、日比野悦三、福永正美

四九　菅沼栄、直原敏衛、長井広石割敏夫、伴野徳三郎、石田大二郎、大津英輔、加藤馨

五〇　梶原忠治、住太郎、梅村魁一一彦、山田喜志夫、大庭富士夫、浅賀博澄、大庭左文、峰田静夫

五一　下山富太郎(4)、田中賢一原崎郁平、佐伯正剛、渡辺寛孝、森弘

五二　田中貞司(4)、服部雅雄、大草知久、岩本良雄、茂呂茂樹、小川善次郎、直原澄衛、綾部立一、遠藤廉、曽根信一、西田豊馬、今井健三

五三　大石巌、奥野孝、小野一夫島田良彦、園田芳男、徳永悠久、橋本久仁寿、月見里得知郎、山菅章雄、桜井昌也、森下洋、宮沢四郎、松前新太郎、野崎昌輔、望月昂、木宮高彦、加藤俊雄、安本修身

五四　庵原悌次、安東哲夫、大畑忠夫、大藤直久、篠原範平佐野資郎、鈴木猛、居初良雄、杉山茂樹、鶴岡保明

五五　相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、松井保治、日比光明、石神庸一、山本孫一

五六　石塚由雄(4)、清水逸郎、萩原仁、杉原恭二、村田大八郎、鶴岡英彦(3)

五七　岩井平一郎、杉山正友、月見里礼次郎、米沢正次、坂田秀雄、菅稔、島根光明渡辺武男、酒井博、小花正昭、大島隆夫、加藤健三、藤巻重男、望月修、山中孝二

五八　奥野広、伊藤健三、天野国明、須山静夫、猪瀬忠賀、鈴木勝義、向井晃、宮崎佐一郎(4)、望月恵一(4)、原木睦雄、花見正人

五九　奥沢徹、川田昭、増田真一小沢武彦、加藤恵一、狩野和男、内田武二(4)、伊藤光雄大村和夫

六〇　上杉重吉、大石隆一、笠間達男、鈴木光男、堤崇、益田清閏、山崎鏡次、新間昌輝、鈴木明、山路敬三、渡辺博、斉木学、井田淳、山本善通、石関忠雄、満間猛、山本雅之助、尾崎龍男黒田武之助(5)

六一　奥野泰助、高村岳史、清水照彦、君島敏男、西田駿之介、大村富士男、片桐篤、青木邦彦(4)、大石次男、仲野辰男、鈴木孝(3)、伊藤久、安原徹治、福田英雄八木貞二、巻田英一、北村鎌二、坪田昭三、山崎和夫

六二・六三　白鳥芳夫(7)、海野昭平、川手生己也(3)、鈴木新之輔(4)、柴田克朗、三枝弘之(3)、鈴木市三、伊東守、勝山弘之

六四・六五　鈴木明郎、野沢正憲浅井幹夫、新井彰、稲見章岩本吉雄、加藤満、神谷武男、栗田行雄、佐野旭、名波倉四郎、中村孝、長島健益頭尚文、村上喜代二、吉井駿亮、渡辺素夫、山本和彦、蛭川博之、松下一男(4)山本光夫、竹内豊、遠藤栄(3)、仲野実(4)、鈴木明郎、柳田堯、望月康逸、時田勝博、山本菊哉

六六　河守輝雄、久保泰夫、田中俊男、辻陽一、増井和夫、山下智康、森山秀夫、安池智策、小嶋清司、菊田聡裕馬淵逸明、大坪信之、原常勝、石川剞二、大村敏夫、山本俊夫、武藤勇、尾入泰彦、大原直樹、瀬尾章、中村伸吾、三原載、曽根錦吾藤原隆二、馬越駿、湯浅謙関本和男(3)

六七　遠藤一彦、梶原由三、黒田

秀幸、小坂博、成岡英彦、福原亨一、稲葉昌弘、岡村英二郎、丸山英久、大村原長尾章、増田安国、加藤友行、鳥居滋夫、角田栄一、児島英男、朝比奈正三、鈴木敏行、加藤要作、矢部隆石川武治（3）

六八　雨宮明生、鈴木俊彦、高橋俊見、塚本浩司、野中省三星野敏郎、荒谷じつ子、大橋勝弘、秋山和也、栗田瑞夫、纐纈晃生、宇田貞子、杉山忠男、大場正己、井口禎、植田勇夫、鈴木満郎、杉山和子、吉崎英輔、瀬戸川徹、曽根義明

六九　松島玲子、田中輝雄、田川邦子、堀場千賀重、加藤哲也、萩野嗣人（4）、原久弥二宮靖雄

七〇　大高源之丞、清水令一郎、鈴木明次、関哲男、中馬敏雄、中村竜二（4）、仁科正雄、味岡宏、柳沢伯夫（7）若林久二、村松勝治（4）、佐々木政之、宮代省一、松隈明雄、北村孝、谷川治弘調子達郎、大長智、石川悟冨田三樹、松永茂、藤巻貞夫、山田隆嗣、白石通子、野田卓男、吉田修、坂本康（3）、桜井規順、田中宏志大場良臣、松岡誠三郎、三上隆英（4）、渡辺勝美

七一　矢部正和、後藤弘枝、海野幸雄、秋田和男、佐藤利治森川滝太郎、青木庄二郎、石川宏、浦田彰、実石欣哉加藤祐史、小池啓治、村松綏啓、篠原直、下　薫、松隈道雄、西野章、曽根敏美山田卓夫、本間啓司、大井康生、海原孝充、山田勝司関本光宏

七二　松木茂夫、山口公子、種茂雅之、野崎誠介、増田欽一清水雅彦、今泉烈、田中敬二、山本隆司

七三　後藤孝子、大石堯史、遠山敦子、石割浩司、山下勇三大嶽隆司、松下晴一、佐藤鐘司、籠宮達二郎、青木道芳、稲葉一宇、中西恭二、渡部伊保子（3）、斉藤義文西山肇、山脇伊久男、笠井裕、望月徹弥

七四　後藤正義、鈴木正孝、佐藤茂秋（3）

七五　池田哲郎（3）

七六　加藤重信、大岩蓮、稲森和夫、岡本天晴、野方重人、三浦位通、小池淳夫、石田久二、清水雅尚、松永秀夫栗田収司、飯田善久、石橋三洋

七七　五十嵐誠、石塚寿子、小田島鏡子

七八　太田節一、上田尚亮

七九　増田安久（4）、小木哲朗

八〇　平口靖則、鈴木真男、竹内尚興、嶋田政子

八一　堀内淳司、多賀谷秀保、小沢基弘

八二　勝又徳明

八三　田辺哲、野口洋一、山田和夫

八四　深津俊郎、池田幸司、増井喜一郎、志村顕、仲田剛、牧野英敏、松村友視

八五　成岡和美（4）、小宮幸夫

八六　藁科名雄、橋村芳一、高橋宏、日比野升勇、安倍敏陽中島京子（4）、滝幸彦、小長井一男、伏見徹、藤田彰山野武尚、塩沢潤

八七　吉永幸弘

八八　厚木義久

八九　平松裕、石橋文子、鈴木真紀夫

九〇　鈴木美保、英公一

九一　鈴木育也、松野敦子、桒原千朗

九二　奥田規之

九三　清水智人、飯田知弘、石野務

九四　塩原文緒

九六　船橋智

九七　紫佳世乃

九八　田代卓靖

九九　高林正彦（3）、滝浪正輝大地肇、小長井晃子、平野勤、谷津弘剛、田中利昭、岩本牧子

一〇〇　岡本朋子、鈴木由美、井上寛之、青山静香、田中佐知子

一〇一　久保大作、甲木雅子、小沢典住、山崎勝喜

一〇二　渡辺圭、笠井勇治、長島庸至、鷲巣大輔、杉山大輔、宮崎秀樹、北村博和、加藤大治郎、西田知崇、川崎智哉、島林学歩、小田切信人武田恵三、二木康充、高野重亮、森宣樹、矢沢智道、大木忠、小板橋厚思、西尾直也、中村和晃、千葉貴志笠文子、伊奈一樹、小泉輝武、松永直恭、神長功人、伊藤公一、山本修、前田清香、三島渉、小長井いづみ和地孝之、五味有希子、河合健志、吉岡大雅、村上泰朗、岡田明、菊地恵子、奥島直子、尾関真由美、海野恵子

一〇三　望月麻帆、大石康太、後藤

総合広告代理店
株式会社　アドプロ
代表取締役　朝比奈正三（67期）
東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階
TEL 03-3254-2171(代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック
熱函病院
院長　小坂　博（67期）
住所　熱海市春日町12—2
TEL 0557-83—3131

あき子、向井陶子、後藤順哉、広瀬洋一郎、石田祐理子、矢田智子、水谷光、白鳥香卓、植田倫之、高橋夕季、鈴木研、長井正人、馬場菜津子、鈴木克典、水野誠、大桝一、和田宣之、加藤隆、加地誠志、小林英之、小竹亜里寿、杉山祥一、池谷直子、小嶋雄、大塚裕文、青木健太郎、井石綾、植村光香、西村幸子、岡本あづさ、鈴木淳子、和田和也、志田真由子、杉山聖、宇佐美達也、小林史明、萩原清美、稲葉礼子、綱本奈歩、長島つねのり、杉山賢也、長谷川容子、柴山慎也、小長井信志、田村陽一、鈴木良和、青木敏、望月徳義

「こえ」

気軽に筆を執って
お送りください

43　望月　孟夫

身体がだるくてテレビを見ながらごろ寝ばかりしていますが、特に病気という事もなく朝夕の犬の散歩だけは出掛けています。

46　鼠入　秀夫

喜寿を超えましたがまだ現役で働いています。医者と画描きと教育委員の三足のわらじをはいてます。

49　石割　敏夫

私はまだ通勤しております。仕事は設計会社の言わば雑用の様なものです。時には図面・計算・雑生の方々の様々な御境遇にあっての感想文を拝見して、人生の多彩さを教えられ、感慨深いものがあります。

54　鈴木　猛

三月末で前の会社を退職。経営労務コンサルタントの仕事を新しくはじめました。又、毎週二回、中国語学校に通って、ブレイン・ストーミングをやっております。昨年五月、二回も開腹手術を受けましたが、今は回復。ゴルフ、麻雀等も再開しました。

55　中田　千束

上京するのもなんとなく憶劫となり、総会も、ここしばらく欠席多し。ゴルフを健康のバロメーターとして、近くのゴルフ場で時間つぶし。

55　戸塚　正五

お蔭で健康にだけは恵まれ毎日元気に過ごしております。

57　月見里礼次郎

六月の同窓会は世話人をやっている他の会と重なって出席出来ず失礼しました。

現役を降りてから種々の団体の雑用が増えて仲々自分の事が出来なくて弱っています。

58　花見　正人

私共の若い時代は戦災で家を焼かれ、馬鹿げた兵隊で餓死寸前まで追いやられさんざんな目に会った。三国人が戦時中の被害の補償を要求している時代に何等顧られず、全く人間感覚の少くなった現代に大して興味がなくなっています。不悪。

60　井田　淳

永い間ご無沙汰致しました。九年間の台湾勤務を終え帰国致しました。今後どうぞ宜しくお願いします。

60　黒田武之助

会報編集の上杉重吉君の絶え間のない努力には脱帽です。

今年もＯＤＡ（政府開発援助）で日本にいる時間があまりありません。元気で頑張っています。

60　斉木　学

四月十八日の同期会に久し振りに出て、旧交を暖める事が出来ました。懐しい人ばかりでした。お会い出来ない人もあり、残念なところもありました。

次回からは、積極的に出席しますのでよろしくお願いします。

61　西田駿之介

勤務はあいかわらず凸版印刷で若い社員の中で雑用をやっています。

62・63　白鳥　芳夫

何時の間にか、自分の歳が卒業回期と同じになっていた。然し、私は未だ、自分のこれからの人生に夢と希望を抱いている。

それは、詩人として、又紀行文作家として生きて行く事です。

62・63　伊東　守

平成四年六月十三日静岡クーポール会館で北川・三浦・八十島三先生と期友五九名が参加して賑やかに開催された。

希望者は午前中鉄舟寺の間処校長の墓に詣で、ご長女夫妻と往時を偲んだ。

翌日は藤枝CCで九名参加してゴルフ会。楽しい同期会でした。

64　新井　彰

会報の同期会報告、いつも六四期を野沢正憲君がよく書いてくれ

国際線航空貨物・海外旅客取扱い
運輸大臣登録旅行業代理店業3440号
㈱フジ・ワールド・エンタープライズ
代表取締役　中馬敏雄（70期）
〒105東京都港区浜松町2-8-9 春原浜松町ビル
貨物電話　3434－0591（代）
旅客電話　3437－5861（代）
FAX　3434－5537

新東京印刷株式会社
代表取締役　梶原由三（67期）
東京都中央区八丁堀2-1-7 神鋼ビル
TEL 03-3553-8981(代表)

て感謝。

回想随感近況なども楽しく読ませてもらっています。

64・65　山本　菊哉

定年退職後も元気でがんばっています。

67　河口　正義

一昨年九月以来千葉県勝浦簡易保険保養センターに勤務、公共の宿として御家族の健全なリゾートにお役に立つよう努めています。

一泊二食付六千円から。照会は〇四七〇―七六―三〇一一へ。御案内さしあげます。

68　雨宮　明生

4年の総会に出席出来ず誠に残念でした。次回は必ず出席して煮えきりオデンを食べようと思っています。

六八期はこの十一月に卒業後四〇周年記念集会を静岡で開催いたしました。オラとオマッチも今年は還暦を迎えます。

70　調子　達郎

静岡市西千代田に生まれ、高校を卒業するまでずっといた故郷です。頭の中には窓ごしにみる富士山、りゅうそう山、城北高校へつながる道路ぱたの一本松、あちこちの小川、梨畑等々昔の景色のままが残っていますので、静岡には帰りたくありません。すべてが崩れる恐さ！

71　関本　光宏

「会報」を読むたびに静岡の山河がよみがえって来ます。

72　松島　正明

静高時代は合唱サークルで歌っていました。今も歌っています。第九、モツレク、メサイアなどをせっせと歌っています。おかげで元気印の毎日です。

73　遠山　敦子（旧姓小澤）

いつもご連絡有難うございます。現在、文部省高等教育局長として大学教育の向上に努力しております。

職務柄、なかなか静岡へ伺う機会もありませんが、後輩の皆さんが、のびのびと力を発揮して下さるよう、いつも期待しています。

73　牧野　昭雄

総会へ何回か出席したが、何期卒業の会のような色彩がつよく、我々七三期は年二回位ゴルフ等々行っているので以後出席者がいなくなった。スタンスは明確にすべきだと思う。

会費の意味がないと思えるが…

74　大嶽　隆司

平成四年の甲子園は残念でした。ここ数年の予選落ちはなんとかならないのでしょうか。せめて甲子園まで行って欲しいのは、OB全員の気持です。

87　伏見　徹

現在KDDに勤務しております。国際通信の発展に努力していきたいと考えています。

今回新規に入会させていただきます。皆様、御指導の程よろしくお願い申し上げます。

哀　悼

杉山茂樹君を悼む

杉山茂樹君（54期）が十二月二十日逝去された。

新聞で彼の亡くなったことを知り、細井君に続いてまた一人級友を失ったことに悲しい思いで、哀惜の念を禁じ得ない。

関東同窓会や同級会の通知を送っても、体調をくずしていて出席出来ないという返事があったが、まさか、そんなに悪いとは思っていなかったので、生前、病気見舞いにも行かなかったことが悔まれて、告別式に参列し、献花をして故人に別れを告げた。

杉山君とは静中卒業後、酒井久雄君と三人で牛込の予備校に通ったことがあり、彼は静高、酒井君は横浜高商、僕は福島高商と別れたが、酒井君とは家が近かったのでよく会い、牛込時代を懐かしみ杉山君が映像の世界で活躍していること（映画プロデューサーとして、「二等兵物語」シリーズなどを製作、のちテレビの「ケンちゃん」シリーズも手がけた。）を喜び合ったものだった。しかし彼とはあれきり遂に会うことはなかった。今はただ、在天の霊よ安かれと祈るのみである。（庵原）

事務局通信

静中静高関東同窓会の会員となって約10年、事務局を正式に担当させて頂いて約一年が経過致しました。

その間、諸先輩方のすばらしい生き方や思想・哲学に触れ、驚いたり感動したり安心したり勇気づけられました。

この会のすばらしい点をあげると、人の幸せを心から一緒になって喜べる仲間の集りだということでしょう。板前さんの世界では、「他人の不幸は鯛の飯」というそうですが、とかく他人の不幸の話を「蜜の味」としがちです。

私の大切にしている心のあり方はオープンマインド、テンダーマインド、タフマインドです。この心をもって会の発展のために喜んでお手伝いさせて頂こうと思っております。

事務局より会員皆様へのお願い

①会費の振込の際には、用紙の裏面に必らず期名を記入して下さい。

②住所変更及び勤務先部署等の変更があった場合は、すみやかに事務局にお知らせ下さい。

③各期の幹事を募集しております。自薦他薦にかかわらず事務局に御連絡下さい。

④会報及び名簿に新たに広告掲載を希望する方は事務局にお知らせ下さい。

事務局担当　87期　薬科　名雄

（電　〇三―三七九二―三五八〇）

新日本証券株式会社

相談役　巖（53期）
㈱新日本証券調査センター常務取締役　石川　治弘（70期）
常務取締役　大谷　幸一（71期）
国際本部課長（香港駐在）　海野　雄郎（71期）
小林　一郎（90期）

東京都千代田区神田駿河台3-11　〒101-03
TEL03-3219-1111（代表）

鈴与株式会社

取締役会長　鈴木与平（44期）

清水市入船町11－1
TEL 0543(54)3015（秘書課）
東京支店　千代田区丸の内2-3-2 郵船ビル4F
TEL 03(3284)0553（総務課）

株式会社 東電社

取締役社長　岩波信平（42期）

東京都品川区西五反田1－14－2
TEL 03(3493)6391（大代表）

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長　奥野　孝（53期）

本社　東京都台東区東上野2-18-7・共同ビル10階
TEL 03-3834-5331（代表）

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長　奥野　孝（53期）
取締役社長　奥野　進（56期）
取締役副社長　奥野　広（58期）

本　社　東京都台東区寿2-5-12　加瀬ビル
Tel 03－3842－6831（代表）
静岡事務所　静岡市安東2-8-14
Tel 054—246—9378

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役　岩井平一郎（57期）

本　社　静岡市国吉田3丁目1番1号
TEL 054(262)1111（代）
東　京　中央区京橋1-1-6越前屋ビル8F
TEL 03(3272)4651（代）

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役　奥澤　徹（59期）

本　社　横浜市瀬谷区橋戸3－25－6　〒246
Tel 045-301-5545
大和工場　大和市深見3706－1　〒242
Tel 0462-62-0340　FAX 0462-62-0343
東松山工場　東松山市大字新郷88－47　〒355
Tel 0493-24-2511　FAX 0493-24-2513

建築設計・監理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役　成岡英彦（67期）

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル
TEL 03-3363-8604（代表）

株式会社 富士越
株式会社 富士越化成

代表取締役　野澤正憲（64期）

東京都渋谷区東2－14－9
TEL (3409)3342（代）
TEL (3400)9541（代）

昼2時より夜11時まで診療

タカラ歯科診療所

代表　藁科名雄（ワラシナ）（87期）

東横線 中目黒下車徒歩5分
TEL 0120-376480

朝10時より夜10時まで診療

鈴木ビル歯科

代表　藁科名雄（ワラシナ）（87期）

京王線 下高井戸駅前
TEL 03-3321-6480